

特集によせて

Encounters 第2号をお届けする。特集のタイトルは *Development Revisited* である。

本来は経済の専門用語であったネオリベリズム（新自由主義）を短縮したネオリベという言葉が否定的なニュアンスを伴いつつ、一般の言説空間に流通し始めたのはここ数年のことである。直接的な契機は、日本における「構造改革」路線の矛盾の顕在化、2007～08年の世界金融危機～リーマンショックに帰されるのかもしれない。しかし、先進資本主義世界で開発／グローバリズム／新自由主義への疑義が顕在化する以前から、第三世界、第四世界などの世界システムにおいて周辺化された地域や人々から開発への疑義は提出され、様々な抵抗と異議申し立てとしての実践が行われてきた。

私事であるが、昨年（2010年）に東京・恵比寿の日仏会館で開催された2つの意義深いシンポジウムに、オーディエンスとして参加する機会があった。ひとつは「“経済”を審問する」（アラン・カイエ氏）であり、もうひとつは「より良い共生が可能な社会を目指して」（セルジュ・ラトゥーシュ氏ほか）である。2009年に青山の国連大学で第2回「アジア連帯経済フォーラム」が開催されたことも記憶に新しい。いずれも、現代に蔓延する功利主義的思考、私たち北の国々や人々の開発観を鋭く批判し、人々の連帯の必要性を説くラディカルなメッセージに溢れていた。単一の価値基準への盲目的依拠、思考・行動様式の画一化への警鐘には、私たち日本人も真摯に耳を傾けるべきメッセージが含まれている。だが、その先で求められることは、近代の欧米型発展史観を単純に否定し、日本の伝統をナショナリスティックに意識した日本型開発モデルを第三世界の人々に再提案する（押し付けなおす）ことではないだろう。

以上のようなことを脳裏の片隅におきつつ、今回の特集を企画した。学内外から寄せられたペーパーはいずれも開発に対する何らの批判的距離を有するという点はほぼ共通する。分析される実践もしくは事象は、ツーリズム、地域振興、教育、地域固有性と多岐にわたる。そこで批判される開発および価値観、そしてその先に希求される「何か」は必ずしも一様ではない。このささやかな紀要が、今後の批判系開発研究および関連する諸分野の発展に少しでも貢献することができれば、特集担当者としてこれに勝る喜びはない。交流文化学科の学生の学びにも、こうした批判的知性のエッセンスを何らかの形で還元していければ、と思う。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、本特集のために原稿を執筆していただいた学外の研究者の方に、厚くお礼を申し上げる。

特集担当

北野 収